

深夜番組の予告表示の統一

平成20年10月3日（金）に放送センターで第1312回放送用語委員会が開催された。

議題1：NHKの深夜時間帯番組予告の表示方法

(1) 問題点

この放送用語委員会では、午前0時から午前4時までの深夜時間帯に放送もしくは再放送される番組を番組、ホームページや番組スポットで視聴者に知らせる場合、どのように放送日、放送時間を表示すべきかについての問題が議論された。視聴者サービス局から問題提起があり、同局視聴者センター・新堀晃弘副部長から議題について説明があった。

午前0時から午前4時までの深夜時間帯は、日にちが切り替わるところで、前日からの延長と考える人がいるなど、人によってとらえ方が異なる。NHKとしての決まりがなく、番組制作者は、個別にわかりやすく表示しようと工夫している。そのため、さまざまな表示がなされ、かえって視聴者に混乱をまねいている。

平成20年8月26日現在、NHKの番組ホームページで見られる、深夜時間帯の放送予告の表示例は、大きく分けて以下の5パターンがある。

***実際の放送：1月2日（水）午前1時10分から放送**
パターン1：

1月1日（火）深夜【水曜午前】1時10分～
パターン2：

1月1日（火）深夜【2日午前】1時10分～
パターン3：

1月2日（水）午前1時10分～（火曜深夜）

パターン4：1月1日（火）深夜1時10分～

パターン5：1月1日（火）25：10～

こうした状況を整理し、NHKとして「望ましい表示方法」を示し、視聴者理解に役立てたいと

いう提案である。

この提案を受けて、放送用語委員会では、以下のとおり「深夜番組の予告表示」の「望ましい表示方法」を承認した。ただし、個々の単一番組の予告の場合の決まりである。定時番組の予告については、別途検討する必要がある。

***「実日実時間（じつびじつじかん）」**とは、実際に放送される日にちと時間を暦どおりにとらえたものを指す部内用語である。

(2) 望ましい表示方法

例：【NHKからのお知らせ】
1月2日（水）午前1時10分～（1日深夜）

①実日実時間の表示を第1とする

理由：深夜時間帯は、どの表示をしても誤解を招くおそれがあり、正確な表示をしたほうが誤解を生じさせない。

②補助情報を必要に応じて加える

補助情報は、実日実時間でいうと前日（放送時間がその延長にあると考えられる日にち）の曜日や日にちとともに「深夜」などの表現を入れるとわかりやすい。

理由：「深夜」と「夜中」はほぼ同じ意味で使われるが、一般には「深夜」のほうがやや遅い時間帯を指すように考えられている。また、「深夜放送」「深夜営業」など複合語としても、この時間帯を指す語として使われることが多い。

***放送当日に番組ホームページなどで番組を広報する場合、「今夜」「きょう」を優先させてもかまわない**（例：「きょう 深夜1：10」など）。ただし、実日実時間も補助情報として入れたほうがよい。また、ナレーションでは、「日づけが変わって午前1時10分から放送」などの補助のことは加えるとよい。

*日をまたいで放送する場合

例：『NHKからのお知らせ』

1月1日(火) 午後11時～(1月)2日午前1時(2時間放送)

1月1日(火) 午後11時～午前1時(火曜深夜2時間)

実日実時間で表示することを原則に、必要に応じてコメントや文字で補助情報を伝える。

番組の終了時間は、入れなくてもよい。

(3) 注意すべき点

時間表示について、以下の4点に注意する。ただし、以下の内容にあたっているものでも、番組の内容や視聴者層によって、あえて使う場合もありうる。いずれも必要に応じて番組ごとに判断することとする。

① 24時間制およびそれをこえる時間表示は、特別な場合以外は避ける

理由：時間表示は1日を午前と午後に分ける12時間制と、24時間制とがある。日本では場合によって両用使われているが、12時間制を原則としている。これは明治5年の「太政官布告」による。こうしたことから、NHKでも12時間制を原則としている。

また、NHKでは24時間表記を原則として認めておらず、それをこえる表示(「午前1時」を「25時」と表現する表示)をとると、混乱をまねくことが考えられる。ただし、若者向けに実験的に放送しているような番組で、24時間をこえる表示をする特別な理由があるものは、各部署で判断する。

② 午前0時以降を前日からの延長としてとらえる表示を主情報とするのは避ける

理由：補助情報は視聴者が見逃したり、判断を間違えたりする可能性を否定できない。これを避けるために、主情報は実日実時間とすることが優先される。

③ 日にちと曜日の混在を避ける

理由：曜日で判断させることは、日にちを視聴者に考えさせることになり、情報の助けにならない。

④ 受け取り方がさまざまな表現を提示するのは避ける。深夜の時間帯を指して、「明日」「明日の朝」「今晚」とは言わない

理由：「遅く」「朝」は人によってとらえ方がこと

なる場合があり、あいまいで理解の助けにはなりにくい。

「今晚」は「今夜」よりやや早い時間帯を指すと考えられ、深夜の時間帯には違和感がある。

「明日」は、実日実時間で考えれば午前0時をこえており、間違いではないが、使う時間帯によっては、1回朝を迎えたあとの「明日」つまり、24時間後のことを言っているように誤解する可能性がある。

(4) 参考資料

以上の予告表示の統一は、2003(平成15)年「ことばのゆれ」調査の結果も参考資料にした(2003年12月11日～14日実施調査。『放送研究と調査』2004年3月号参照)。

(12時間制/24時間制)

Q. 夜の時間を言うのに目で見てもわかりやすいのはどちらですか？

A 1.

午後9時	80%
21時	19%

A 2.

午後2時	78%
14時	21%

Q. 朝から昼にかけての時間を言うのに、目で見てもわかりやすいのはどちらですか？

A.

午前11時から午後2時	71%
11時から14時	27%

(深夜時間帯の表示のしかたについて)

Q. 12月1日から12月2日にかけての夜中の時間についてうかがいます。目で見てもっともわかりやすいのはどれでしょうか。この中から1つだけお答えください。

A.

12月1日午前1時	20%
12月1日深夜1時	11%
12月2日午前1時	37%
12月1日25時	1%

 主要4項目のみ(夜の時間帯の表現)

Q. 「午前0時～午前3時」の時間帯をひとことと言う場合、次のどれを使いますか。この中から1つだけお答えください。

A. 夜2%, 夜中38%,

深夜	56%
----	-----

, 未明3%, 夜半過ぎ1%

用語委員会の席上、広報局・制作部の久保安夫部長から番組の広報スポットでの時間表示のルールについて説明があった。

広報局・制作部の時間表示のうち、深夜の時間帯のルールは以下のとおりである。

- ・実日実時間を基本とし、24時間制や24時間をこえる表示は使わない。
- ・午前0時をすぎて午前3時台までは「日付(曜日) (午) 前〇:〇〇」とし、補助情報として、前日の曜日と「深夜」ということばを入れる。
- ・放送日当日には、その日の延長と考え「きょう深夜〇:〇〇」とする。

番組スポットでの時間表示のルールは、今回の提案と大きくことなる部分はない。

(5) 放送用語委員の意見

天野祐吉委員：「実日実時間」でよいと思う。視聴者の感覚でいえば、新聞のテレビ欄のっているものが「今日のテレビ」である。午前0時をこえたからといって「明日のテレビ」にはならない。この感覚からいえば、午前0時すぎを、前日からの延長ととらえる書き方も違和感なく受け入れられる。しかし、配慮しすぎると、その配慮がかえってアダになる場合もある。ここは「実日実時間」で割り切ってはどうか。

清水義範委員：「実日実時間」でなければ困る。「午前0時」をまわっても「今夜」であると考えて「今夜の夜中」などというのは、感覚では理解できるし、親切なようだが、録画予約する場合には、かえって迷惑である。補助情報については、今日が何曜日かを意識している人が多いとは思えず、曜日を示すのは親切ではないだろう。24時間制をこえる表示は絶対に避けてもらいたい。「25時」や「26時」という時間の表示方法は、もともと放送業界の「隠語」として使われてきたものである。NHKではこうした「隠語」を表に出すのを食い止めてほしい。

井上由美子委員：基本的には提案どおり「実日実時間」に賛成する。しかし、人によって時間

の感覚はさまざまであり、状況によってもことなる。これだけでは割り切れない部分もあると思う。また「民放」との違いが出てしまうことも考えたほうがよい。民放では「実日実時間」の表示は少ない。深夜の時間帯は前日からの延長であるという考え方で表示しているようだ。テレビガイド誌にのせることを考えて、こうした表示が多くなるのだろう。NHKで「実日実時間」を使うのであれば、何かしらの告知をしないと、視聴者は混乱するのではないか。

荻野綱男委員：「実日実時間」でよいと思う。時間の表示については、その人の視聴形態や録画の仕方、持っている録画機器によって、どの表示がわかりやすいかはことなる。また、若い人と高齢者でも時間感覚の違いがあるだろう。寝る時間や起きる時間にも関係があり、寝る時間が遅い人は、寝るまでが「今日」であるという感覚が強く、たとえ「午前0時」をこえていても「翌日」と表示されると違和感がある。一方で、早く寝る人は寝ている深夜の時間帯を「翌日」と言われてもさほど違和感を持たない。以前は24時間放送がされておらず、放送を休む時間帯があった。その時代には、「その日」の最後の放送が終了するまでは「今日」であるという感覚があったのかもしれない。しかし、24時間放送が一般的になり、「午前0時」すぎが前日の延長であるという感覚は薄れてきているのではないか。さまざまな状況に対応するためにも「実日実時間」しかないように思う。その際には補助情報をそえるまでもないのではないか。

杉戸清樹委員：提案に賛成する。ただし、文字で示す情報と、話しことばとして耳から入る情報では違いがあるべきだと思う。耳から入る情報であれば、「注意すべき点」にあげられている「今晚遅く」「明日朝」などの表現はまぎらわしさが増すだろう。これまでの調査の結果から、時間を表す語は年代や住んでいる場所によって感覚がことなり、かなりの幅をもって意識されていることがわかっている。「実日実時間」をもとにしつつ、視聴者層によってわかりやすい話しことばのコメントを補助情報としてつけるなど、幅広くさまざまな表現を取り入れてもいい

のではないだろうか。今回の提案は文字で示す情報のこととして考えた。今後、話しことばによるコメントについての工夫を検討してほしい。

井上史雄委員：提案に賛成する。この表示方法しかないと思う。ただ、これだけが正しいとすると不便だろう。たとえば補助情報として「日にち」「曜日」「深夜」すべてを入れるというのもわかりやすいのではないか。望ましい形を1つにせず、幅を持たせてはどうだろうか。

深夜の時間帯の表現については社会層や地域によってとらえ方がことなる。これには、生活時間の変化が大きくかかわっている。時代によって1日の区切り点がことなっている。たとえば九州で「昨日の晩」というのは「実日実時間」という「おとといの晩」のことを指していた。これはかつて「日暮れ」が1日の区切りであったためのズレである。夜なべの習慣が広がり、1日の区切りが夜中に食い込み、「うしみつ時」と呼ばれる時間にまでズレた。現在の都会の若者では、「午前4時」「午前5時」が1日の区切りになっているといえる。気象情報などで午前0時から「未明」が始まると定義するのも、こうした1日の区切り点の変化による。

水谷修委員：事実を伝えることばと場面や人間関係にかかわることばとがある。今回の議題をはじめとして、放送のことばは真実を伝えることばである。公共放送としては、いろいろなことに配慮してサービスしなければいけないが、事実を伝えなくてはいけない場面であることを考えれば、徹底的に「実日実時間」をおし進めるべきだろう。そうでないと混乱がおこる。「深夜」「夜中」「今夜」や「今日」ということばでも、あいまいさがある。冷たい放送になってしまうが、文字情報では、事実だけを伝えることを考えたほうがいい。

このほかNHKの部内委員からも提案どおり承認するという意見が出された。「補助情報」については、「必要に応じて判断する」ことを確認した。

議題2：『NHK 新用字用語辞典』改訂について

「常用漢字表」の見直しについて、小板橋靖夫

主任研究員が説明をした（くわしくは、『放送研究と調査』2008年9月号参照）。

次に「四字熟語」のませ書きなど、今後『NHK 新用字用語辞典』を改訂する場合に問題になるであろう点について議論した。

NHKでは、「四面楚歌」や「猪突猛進」の「楚」や「猪」のように常用漢字に含まれていない語が入った漢語をどうしても使わなければいけない場合「四面そ歌」「ちょ突猛進」とませ書きするようにしている。漢語は耳で聞いたときにわかりにくく、放送のことばとしてはそのまま使うのではなく、言いかえることを第一に考えるためである。コメントなどを逐語字幕で出す場合には、言いかえることができないなど、『NHK 新用字用語辞典』が最初に発行されたころとは状況が変わっている。こうしたことを踏まえて、漢語のませ書きについてどう考えるか、用語委員の意見を聞いた。

(1) 放送用語委員の意見

井上史雄委員：四字熟語などの漢語を漢字で書いたほうがいいというのは、そのことばの意味がわかる人である。そういう人に対して漢字を使うのは効果的だが、意味や漢字を知らない人に同じことをしても効果は少ないだろう。視聴者層によって判断してはどうだろうか。

杉戸清樹委員：個人としては四字熟語について漢字で書くべきだと思うが、語によって判断するなど限度を設けるべきだろう。四字熟語と言ってもいろいろなレベルのものがある。「四面楚歌」と「魍魎魍魎」では難しさに差があるだろう。四字熟語に関していえば、常用漢字表以外の漢字であってもふりがなをつける語とそうでない語を独自に検討してもいいのではないか。

山下洋子（やました ようこ）

第1312回放送用語委員会（東京）

【開催日】平成20年10月3日（金）

【出席者】水谷 修氏、井上史雄氏、杉戸清樹氏、天野祐吉氏、清水義範氏、荻野綱男氏、井上由美子氏、岩澤忠彦 NHK 放送文化研究所長 ほか